

朝鮮戦争における毛沢東の参戦動機の再検討

～先行研究のレビューを中心に～

于 麗雅

【要旨】

1950年6月25日、金日成の南進によって朝鮮戦争が勃発した。3年後、休戦協定の締結により、戦闘が終焉した。朝鮮戦争は最も研究されている戦争の一つとも言われており、休戦後の50年代から、今日に至るまで、一貫して研究されているテーマである。朝鮮戦争は、朝鮮半島史、東アジア関係史、及び冷戦史の中でも重要な位置付けがなされている。更には、中朝関係の変遷にも大きな影響を与えている。もし中国が参戦しなければ、その後の東アジアの国際秩序はまったく違うものになったとよくいわれる。すなわち、中国の朝鮮戦争の参戦が、現在に至るまでの東アジアの国際関係を決定したと言える。中国の参戦過程については、初期段階の研究において、推測のレベルでしかなかった。しかし、80年代後半からの中国および90年代のロシアのアーカイブ資料の公開により、中国の朝鮮戦争への参戦過程は次第に明らかになってきた。しかし、当時の中国指導者である毛沢東の参戦動機については、不明なところがまだ残っており、より深く研究する必要がある。本論文においては、まず、朝鮮戦争における先行研究をレビューした上で、そこに描かれた毛沢東の参戦動機を整理する。

キーワード：朝鮮戦争、毛沢東、北朝鮮、中国参戦

1. はじめに

近年、北朝鮮の核・ミサイル開発問題や、非武装地帯での地雷爆破事件などにより、朝鮮半島の緊張は高まっており、日、中、米、ロを含む国際社会からの注目を集めている。特に、中国は隣接する北朝鮮に大きな影響を及ぼす存在であり続けた。他方で、長年の経済援助や近年の核実験問題のように、中国は北朝鮮との関係には苦慮してきた面もある。では、両国の関係が始まって間もない時点で勃発した朝鮮戦争（1950年6月～1953年7月）の時期の両国の関係はどのようなものだったのであろうか。そもそも中朝両国は「血で結ばれた同盟」と呼ばれてきたが、最近、そのような美化された関係に疑問を呈する主張も出できている¹。中朝関係は東アジアの国際関係の中でも重要な部分であり、中朝関係を明かにすれば、東アジア全域の総合理解にも貢献できると考えられる。

中朝関係の初期において、その後の関係まで決定づける出来事となったのは朝鮮戦争で

¹ 沈志華（著）、朱建栄（訳）（2016）、『最後の「天朝」——毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（上）（下）』岩波書店

あり、中国が朝鮮戦争に参戦したからこそ、現在に至るまでの東アジアの国際関係を決定したと言える。すなわち、もし中国が朝鮮戦争に参戦していなければ、現在の東アジアの国際関係もまったく違ったものになったと考えられる。一方で、今日においても朝鮮戦争は謎が多い戦争であり、当時の中国の北朝鮮への参戦政策の決定過程も複雑であった。

中国の参戦動機については、学术界にも論争が多い。冷戦終結以降、ロシアのアーカイブの公開によって、中国の朝鮮戦争への参戦の政策決定過程については、次第にわかってきた。当時の中国共産党政治局の中では、出兵すべきかどうかについて、大きな論争があり、出兵すべきだと主張したのは毛沢東であった。毛沢東の参戦動機に関する研究は、朝鮮戦争研究の中の一部となるため、毛沢東の参戦動機を解明する前に、まず、朝鮮戦争研究全体を把握する必要がある。

筆者はこの論文を通じ、朝鮮戦争に関する先行研究を整理した上で、朝戦争研究について三つの研究段階に分けることとする。すなわち、朝鮮戦争研究の第一段階は 80 年代以前であり、第二段階の研究は 80 年代後半から 2000 年頃までとする。また、第三段階は、2000 年以降となる。なぜ、このような段階に分けたのか、また、各段階の朝鮮戦争研究においてどのような研究成果があるのか、どのような資料に依拠したのか、そして、どのような特徴があるのかについて、以下述べる。

2.1 先行研究

朝鮮戦争に関する先行研究は極めて多い。最も盛んに研究が行われている国は、当然、戦争にかかわった中国、アメリカ、韓国、ロシアである。

2.1 第一段階の研究（80 年代以前）

1980 年代以前、朝鮮戦争は社会主義の国家においてまだ十分研究されていないうちに、すでに西側諸国においてかなり研究が行われていた。しかし、アーカイブ資料の公開の限界があり、この時期の朝鮮戦争研究はほとんど、国際政治学の側面から分析されたものであり、歴史研究とは言えない。この時期の代表的な研究には、アメリカの政治学者であり、中国の対外関係を専門とする Allen S. Whiting の著作がある²。

朝鮮戦争休戦後 25 周年の際に、アメリカにおいて『朝鮮戦争：25 年後の観察』が出版され、再び研究者たちの興味を引き起こした。また、1976 年から、朝鮮戦争に関するアーカイブが、アメリカ国務省で出版された *Foreign Relations of the United States* において公開された。同じ時期、イギリスにおいても次第にアーカイブが公開され、これを契機に、70 年代後期には、西側諸国において朝鮮戦争に関する研究が活発に行われるようになった³。そ

² Allen S. Whiting, *China Crosses the Yalu: The Decision to Enter the Korean War*, Stanford, CA: Stanford University Press, June 1, 1960

³ 代表的な研究には、Robert R. Simmons, *The Strained Alliance: Peking, Pyongyang, Moscow and the Politics of the Korean Civil War*, New York: Free Press, 1975, などがある。

の後、70年代半ばから90年代初期にかけて、西側諸国において、アーカイブを利用した朝鮮戦争に関する歴史研究も盛んになった。

しかし、この時期の研究はほとんど、アメリカのアーカイブに依拠して行われたものである。したがって、この時期の研究対象はアメリカを中心とする戦争に関する政策決定などが多い。朝鮮戦争期の中国とソ連の政策決定に関する研究にはわずかにあるものの、推測のレベルに止まらざるを得なかった。

日本における代表的研究として、日本における朝鮮戦争研究の第一人者である神谷不二の『朝鮮戦争—米中対決の原形』(1966,2 中央公論社)が出版され、1990年には、第二版も出版された。

2.2 第二段階の研究 (80年代後半から2000年頃まで)

朝鮮戦争における中ソ同盟および中国の参戦問題などの議論は1990年代初期に入ってから、優れた研究が次第に出てきた。その理由として、根拠になる大量の朝鮮戦争に関するアーカイブ文献と口述資料が1980年末期から少しずつ公開されてきたことがある。

このようにして、朝鮮戦争研究が再び盛んになっていくのは、80年代末あるいは90年代初頭からである。この時期に、まず中国においては大量のアーカイブ文献が出版された⁴。そして、当時の重要な関係者の回顧録も出版されるようになってきた。90年代半ばに入って、中国の档案法の修正に伴い、中国の省、市レベルの档案馆が開館され、一般研究者たちも一次資料であるアーカイブ資料を入手できるようになってきた。

同時期に、アーカイブ資料を用い、公式の組織によって出版された人物伝記、歴史年表なども出現した⁵。また、研究者が参考にできる戦争関係者のオーラル・ヒストリー資料も次第に出版されるようになった。その中には、毛沢東の通訳者の師哲、外交部副部長であった伍修権、義勇軍幹部の杜平などがいる。

中国のアーカイブ資料とオーラル・ヒストリー資料の出版は他国の歴史研究者にも注目された。『建国以来毛沢東文稿』の中の中国指導者の参戦決定過程および戦争初期の電報をはじめとして、在米華人学者に翻訳され、アメリカの学術雑誌に紹介された。

これらの重要なアーカイブ資料の公開によって、90年代初期から中国の参戦に関する研究成果が次々に出された。中国国内の研究では、軍事専門家の徐焰の『第一次較量—抗美援朝戦争の歴史回顧与反思』(中国広播電視出版社、1990)が優れている。また、アメリカの学術界においても、中国のアーカイブ資料を利用した研究が出版されるようになった。中でも最も優れているのは、在米華人研究者である Chen Jian, *China's Road to Korean War* (The University of North Carolina Press, Chapel Hill London, 1994)、Zhang, Shu Guang, *Mao's Military Romanticism: China and the Korean War 1950~1953*, (Lawrence: University of Kansas Press, 1995)、Sheng, Michael M., *Battling Western Imperialism: Mao, Stalin, and the United*

⁴ 『建国以来毛沢東文稿』、『中共中央文件選集』、『建国以来重要文献選編』、『毛沢東軍事文集』、『中国共産党宣伝工作文献匯編』、『毛沢東外交文選』、『彭德懷軍事文選』、『周恩來外交文選』など。

⁵ 『中国人民志願軍抗美援朝戦史』、『彭德懷伝』、『周恩来年譜 (1949~1976)』など。

States, (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1997) などである。また、在日中国人研究者である朱建栄は日本の朝鮮戦争研究において、最も早く中国アーカイブ資料を導入した研究者である。朱は、当時の条件下において、主に世界各地の先行研究を基礎に、独自の調査と新しい資料の収集を中心に行い、1991年に、『毛沢東の朝鮮戦争』(岩波書店, 1991)を出版した。

中国のアーカイブ資料の公開に伴い、ロシアにおいても大量の回顧録とインタビュー資料が発表された。1990年代半ばのロシアによる公文書の公開は朝鮮戦争研究の転換点になる。更に、1994年6月には、ロシアのエリツィン大統領が韓国の金泳三大統領に朝鮮戦争に関する資料を提供した。その直後に、韓国の新聞はそれらの文献をもとに翻訳し、編集したものを掲載した。

ロシアのアーカイブ資料公開に伴い、より多くの朝鮮戦争に関する一次資料が世界中の朝鮮戦争研究者に使われるようになってきた。最初にこれらの資料を入手したのはアメリカの研究機関である。それに対して、中国において、最も早くこれらの資料を入手したのは沈志華である。1995～1996年の間、沈は李丹慧などの研究者とロシアとアメリカを数回訪問しアーカイブ資料の収集を行った。また、沈は中国人民解放军軍事科学院の斉徳学などと一緒にロシアのアーカイブ資料を翻訳し、中国国内の研究者らの使用のために提供した。

ロシアの朝鮮戦争関係者の回顧録とインタビュー資料の公開は、ロシア、韓国、アメリカ及び中国の研究者の注目を集め、新しい研究成果が次第に出されるようになってきた⁶。一方、中国では、ロシアのアーカイブ資料を利用し発表した楊奎松の『金日成阻止了毛沢東進攻台湾計劃—俄国外交部档案揭秘』(『明報日刊』1994年7月号)と沈志華の諸著作が優れている。

これらの先行研究はそれぞれ、朝鮮戦争のなかの中、ソ、朝のそれぞれの関係を研究してきた。各研究者の主張は同じではないが、歴史の再現に努める姿勢は共通であった。中国とロシア双方のアーカイブ資料を比較しながら、優れた研究を行ったものとして、沈志華の『毛沢東、スターリン、与韓戦』がある。

2.3 第三段階の研究 (2000 年以降)

第二回の研究ブームは2000年頃まで続いた。2000年に入ってから、現在までは、朝鮮戦争研究の第三段階と言える。朝鮮戦争勃発の五十周年後に、中ソ同盟および朝鮮戦争に

⁶ Kathryn Weathersby, “Soviet Aims in Korea and the Outbreak of the Korean War, 1945～1950: New Evidence from the Russian Archives”, *CWIHP Working Paper*, 1993, No.8; Kathryn Weathersby, “The Soviet Role in the Early Phase of the Korean War: New Documentary Evidence”, *The Journal of American-East Asian Relations*, 1993, Vol.2, No.4; Jon Halliday, “Air Operation in Korea: The Soviet Side of the Story”, in William Williams (ed.), *A Revolutionary War: Korea and the Transformation of the Postwar World*, Chicago: Imprint Publications, 1993; William Stueck, *The Korean War: An International History*, Princeton: Princeton University Press, 1995

関するアーカイブ資料に更に光が当たるようになった。中国側には、一級のアーカイブ資料の公開のみならず、2004年には、中国外交部档案馆の関連資料も公開された。そこでは、中国の参戦政策に関するアーカイブは公開されていないものの、停戦協議およびジュネーブ会議の部分はほとんど公開された。

しかし、ロシアでは、プーチンが大統領に就任してから、政府のアーカイブ管理政策は引き締めの傾向にある。外国の研究者は言うまでもなく、ロシアの研究者でも重要な資料を見ることが難しくなってきた。これに対して、21世紀に入ってから、アメリカは中央情報局のアーカイブ資料を大量に公開してきた。2004年10月、アメリカの国家情報会議

(National Intelligence Council, NIC) と研究者のためのウッドロウ・ウィルソン国際センター(Woodrow Wilson International Center for Scholars)が国際的な学会を開いて、アメリカ、中国、ロシアの研究者たちを集めて、中央情報局のアーカイブ資料について、更に深く分析を行った。その後、2010年6月、中央情報局、ウッドロウ・ウィルソン国際センターとトルーマン図書館が再び朝鮮戦争に関する研究学会を開催した。その際に、中央情報局による朝鮮戦争時期の日々の報告などの新しいアーカイブ資料が公開された。

そこで、中、ソ、米三方の新しいアーカイブ資料が朝鮮戦争研究学術界の中で流通するようになり、新しい研究成果も多く出現した。この段階では、中国学術界において、学術著作は少ないものの、軍事研究機構から出されたものが多い⁷。この時期に出された中国の学術論文は、以前に出されたものに比べ、議論の対象となったテーマはより広がっている。中国の参戦過程は以前より更に深く、細かく研究されるようになってきた。中国指導者の政策決定に関して、様々な角度から分析した論文が次々に発表された⁸。また、中国の参戦問題以外に、停戦協議問題、ソ連の軍事支援問題、朝鮮戦争と中国経済発展などのテーマも中国研究者の間では課題になっている。

日本において、ロシアのアーカイブ資料を参考に書かれたものとして、和田春樹の『朝鮮戦争全史』(岩波書店、1995.1.30 第一版、岩波書店、2002.3 第二版)と、下斗米伸夫の『モスクワと金日成——冷戦の中の北朝鮮 1945-1961年』(岩波書店、2006年)がある。前述の朱建栄は、中国の北京、上海などに赴いて、新しい研究資料収集とインタビュー調査を行い、2004年に『毛沢東の朝鮮戦争』(岩波書店、2004.7) 第二版を出版した。

2000年代に入ってから、最も数多く研究成果を出したのは英語による著作である。ブルース・カミングスなどの先駆的な研究者らが新しい著作を発表したのみならず、若い研究者も活躍している。彼らは、すでに研究されたテーマに対して、新しい解釈を行い、以前に触れてなかった部分である世論と朝鮮戦争の関係や捕虜問題などの新しい領域を開拓した。

韓国においても、第三段階における研究は前の時代に比べ、より多くの研究成果が出さ

⁷ 齊徳学の『巨人較量—抗美援朝高層決策和指導』(中共中央党校出版社、1999年版)、徐焰の『毛澤東与抗美援朝戰爭—正確而輝煌的运筹帷幄』(解放軍出版社、2003)など。

⁸ 代表的なものとしては、章百家の『从危機處理的角度看抗美援朝出兵決策』、牛軍の『朝鮮戰爭中中美決策比較研究』、沈志華の『中国出兵朝鮮決策的是非成败』、劉統の『中共对朝鮮戰爭初期局勢的预测与对策』、李捷の『对抗美援朝決策過程階段特点的几点分析』などがある。

れている。代表的な研究者として、朴明林、金肩東などがいる。2016年、沈志華が執筆し、朱建栄が訳した『最後の「天朝」——毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮(上・下)』(2016,9,7 岩波書店)が日本で出版された。これは日本で出版された最新の朝鮮戦争研究書である。

3. 先行研究の転換点

朝鮮戦争に関する研究は、どのような新しい研究成果を生み出せるのか。アーカイブ資料の入手が非常に重要である。80年代末から90年代の初期にかけての中国とロシアの公文書の公開は、朝鮮戦争研究の転換点となった。それによって、朝鮮戦争の起源、および中国の朝鮮戦争への参戦の歴史の過程などがわかるようになってきた。

中国とロシアがアーカイブ資料を公開する前の西側諸国の朝鮮戦争研究はほとんど、政治学や国際関係論の理論に基づき戦争に至る政策決定を分析し、推測していた。結論として、想像にすぎないものもあった。しかし、中国とロシアの公文書、特にロシアの公文書の公開により、かつて「推測」でしかなかった主張が覆された。

一例を挙げると、ロシアの公文書が公開される前の1950年代—1990年代半ばまで、学术界には、中国とロシアの朝鮮戦争における役割については「共謀論」が強かった。しかし、ロシア資料の公開によって「共謀論」は覆された。

中国が北朝鮮と共謀していたという論点を支持する根拠として以下の二点が挙げられる。一つ目は南進させたのは人民解放軍に所属した朝鮮族の部隊であり、それは北朝鮮の最精鋭部隊であった。二つ目は南進前に、金日成は北京に行って、毛沢東と秘密会談を行っていることである。

これに対して、90年代のロシアの公文書の公開により、南進前の毛沢東の考え方が次第にわかってきた。金日成の南に侵攻しようとする願望に対して、毛沢東は南に侵攻しないようにと勧告した⁹。そうすれば、アメリカの干渉は不可避になるからとして、はっきりと反対姿勢を示し続けていた。1950年2月から5月にかけて、スターリンは南進反対から支持へと方針を転換した。トルーマンの声明とアチソン演説によって、スターリンは米国が兵力を投入し直接軍時介入する可能性が低いと判断していたからである¹⁰。3月、金日成が訪ソ中に、スターリンは同意したが、南進を実行する前に、もう一度中国指導者の意見を聞くようにと指示した。そこで、金日成はモスクワから北京へ赴いて、毛沢東に二点を告げていた。南進作戦はスターリンの同意と全面的な支持を得ていること、そして、この戦争はすぐ終わる戦争で、北朝鮮は完全に勝利するから、中国の援助は要らないということであった。つまり、毛沢東は、スターリンの支持をもらった金日成に反対しにくかった。しかし、その後、毛沢東は、スターリンと金日成とは共謀してはいなかったという事実を理解するようになる。

朝鮮戦争の研究者の中には、歴史研究者と政治学研究者の双方がいるが、両者の共通点

⁹ 牛軍 (2007)、『冷戦期中国外交の政策決定』千倉書房、46頁。

¹⁰ 沈志華 (1999)、『中ソ同盟与朝鮮戦争研究』広西師範大学出版社、107頁。

は、どちらも歴史史実を重視しているものの、政治学者は理論によって、歴史の因果関係を説明することに重点を置く。しかし、歴史史実がわからなければ、理論の分析もできない。そこで、アーカイブ資料の重要性が顕著になった。

朝鮮戦争は冷戦史の中でも最もよく研究されている戦争として、いくつかの学会が存在する。各学会、研究団体の間では、アーカイブ資料の流通と共有で協力が行われている。冷戦終焉後の、各国のアーカイブ資料の公開および各研究団体間の協力によって、朝鮮戦争研究が活発になった。

4. 先行研究を踏まえた毛沢東の参戦動機

ここまでは、朝鮮戦争研究の変遷と各段階の特徴をまとめてきたが、以下、先行研究における毛沢東の参戦動機についての代表的な主張を整理しておく。

沈志華（『出兵朝鮮の決策過程及動機分析』『炎黄春秋』、2015年第2期）は、毛沢東が積極的に参戦を主張した理由としては、まず、国際共産主義陣営の分担による責任を負うことがあり、そして、アメリカの第7艦隊の台湾海峡封鎖から引き起こされた台湾問題に対する反発、及びアメリカが中国大陆に侵攻することへの憂慮であり、最後に、中ソ同盟を強固にし、中華人民共和国の政権を固めるためであったと主張している。それに対して、牛軍（『冷戦期中国外交の政策決定』、千倉書房、2007年）は、国家としての威信を失わないためという面もあると主張している。

4.1 国際共産主義陣営の分担に責任を負う

1949年夏、劉少奇は秘密訪ソした時、中ソは国際共産主義運動への責任を分担すると合意した。中共中央は、アジア共産主義運動を支援することというのは、共産主義陣営の責任を分担するだけではなく、自国の安全保障にもかかわると考えていた。そのゆえ、朝鮮半島の共産主義革命が中国の支援と支持が必要になった時、毛沢東は光栄な使命観を感じた。そして、いざ北朝鮮政権が存亡の危機に陥ったら、必ず全世界の共産主義陣営にも影響を与えることになる。そのような状態になれば、共産主義陣営の中での中国のイメージにもダメージを与えることになる。これに対して、中国が出兵すれば、その後のアジアの共産主義陣営における統率力と発言力も強くなると沈志華は主張している。

4.2 アメリカの第7艦隊の台湾海峡封鎖から引き起こされた反米感情

金日成の南進攻勢に対して、アメリカは直ちに反応した。アメリカは、金日成の南進が朝鮮半島の内戦だけではなく、共産主義陣営が全世界に宣戦し、さらに、第三次世界大戦の始まりにもつながると認識していた。アメリカは、中朝ソが共謀して、金日成が南進し始めたことと誤認してしまったからこそ、直ちに第7艦隊を台湾海峡に派遣した。すなわち、

朝鮮戦争の勃発によって、アメリカの対立の正面に置かれたのは北朝鮮ではなく中国であった。それに対して、毛沢東は強烈に反応した。

実際、朝鮮戦争が勃発した後に、中国は通常のニュース報道以外に、しばらくは正式な宣言や声明などをほとんど発表していなかった。しかし、アメリカの第7艦隊の台湾海峡派遣については、27日に毛沢東が演説、28日に周恩来が声明を発表、29日に『人民日報』に社説を発表し、7月中旬までには、国内の対米抗議運動はすべて朝鮮問題よりも台湾問題に向けられていた。

中国は建国後に、向ソ一辺倒の政策を取ったが、西側諸国との接触は断絶してはいなかった。しかし、米国との関係においては公式の外交チャネルは有していなかった。中国は新政権の誕生後に、国内の政治安定を維持しながら、国際社会において一定の位置を確保しなければならなかった。その意味では、アメリカとも交渉する余地を保留せざるを得なかった。しかし、アメリカの第7艦隊の台湾海峡派遣は、完全に毛沢東の中台統一願望を幻滅させた。台湾統一の計画がアメリカの干渉により難しくなった時、毛沢東の米国に対する激しい感情が高まった。

そもそも毛沢東は、金日成の南進により、必ずアメリカの干渉を招くことを予想したが、アメリカの対中干渉は予想外であった。もし今後、アメリカがまた朝鮮半島にも干渉するのであれば、中国としては絶対譲れないと毛沢東は決心したと沈志華（2015）は述べている。

4.3 アメリカが中国大陸に侵攻することへの憂慮

アメリカが対北朝鮮の戦線を徐々に北に押し返した際、中国の国境安全問題が次第に浮かび上がってきた。当時のアメリカ軍司令官マッカーサーは、中国内陸への原爆投下を示唆したが、トルーマンに否定された。アメリカ国家安全委員会の文件によれば、たとえ中国は、朝鮮半島、台湾に兵力を投入するとしても、できる限り米国との全面的な戦争と避けたいと考えていた。中国と北朝鮮は1000キロ以上の国境が接触している。たとえアメリカは中国にまで侵攻することを考えていなくても、米国によって朝鮮半島を統一され、隣国が「友好国」から「敵国」になったら、中国にとって脅威となる。

地政学以外に、毛沢東は、国境の安全だけでなく中国自身の主権も干渉される恐れがあるという脅威も感じた。沈志華（2015）は主張している。スターリンは、もし中国が出兵しなければ、金日成が中国の東北地方に亡命し、亡命政権を建てることを許してやってほしいと述べた¹¹。しかし、万が一、その故に、アメリカとの戦争を中国の東北地方に引き込んで、ソ連は中国を支援するという理由で中国東北地方に出兵することになれば、中国の東北地方における主権を守れなくなるかもしれない¹²。中国にとって、北朝鮮という援衝国を失うだけではなく、自分の領土内に不安定要因を抱えこむことになる。

¹¹ 牛軍（2007）、『冷戦期中国外交の政策決定』千倉書房

¹² 沈志華、「出兵朝鮮の決策過程及動機分析」『炎黄春秋』、2015年第2期、65頁。

4.4 中ソ同盟を強固にし、中華人民共和国の政権を固める

中華人民共和国は1949年に建国されたばかりで、新政権を安定させ、経済を復興させることが最優先であった。しかし、長年の戦争に疲れ、国民党の反攻を防ぎ、都市建設及び経済復興を推進するのは新政権にとって非常に難しい。内憂外患の環境の中、新政権を固めるためには、ソ連の力に頼らざるを得なかった。しかし、新中ソ同盟条約の締結の過程において、毛沢東は既にスターリンに不信感を抱えはじめていた。中国は既にアメリカと決裂したが、またソ連とも決裂すれば、中共新政権にとって、更に難しい情報に直面することになる。このような時期に、毛沢東はソ連に従わざるを得なかった。

4.5 国家としての威信

1950年10月3日、周恩来はインドの中国駐在大使パニッカルを至急呼び出し、インドを通じて米国側に、もし米国（韓国ではない）軍が38度線を越えれば、中国は座視するわけにはいかない、ということを伝えるよう依頼した¹³。中国はアメリカに「38度線を超えないで」とはっきり声明し、警告した以上は、中国として出兵しないと中国の外交的な警告は今後一切説得力を持たなくなると牛が（2007）主張している。

5. おわりに

以上より、朝鮮戦争に関する研究および主流となっている毛沢東の参戦動機を整理した。毛沢東の参戦動機については、大体二つの考え方に分かれている。すなわち「安全説」と「革命説」である¹⁴。安全説というのは、米軍が38度線を越えて、鴨緑江に押し迫り、中国本土の安全が脅かされたからこそ、中国が参戦した。最も早い段階にこのような主張を出したのは前述したAllen S. Whitingである¹⁵。それに対して、「革命説」というのは、毛沢東はそもそも社会主義陣営のリーダーとして、同じ社会主義陣営の国を守る使命観を持っていて、資本主義であるアメリカに対して戦うしかないという根強い信念を持っていたから、積極的に参戦を主張したという考え方である。このような主張を支持する研究者にはChen. Jianなどがいる¹⁶。前述のように、初期の朝鮮戦争研究は、研究対象の範囲が限定されていた。しかし、毛沢東の参戦動機は単に「安全説」と「革命説」となる二つの学説

¹³ 沈志華（著）、朱建榮（訳）（2016）、『最後の「天朝」——毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（上）』岩波書店

¹⁴ 沈志華（2008）、『毛沢東・斯大林与朝鮮戦争』広東人民出版社。

¹⁵ Allen S. Whiting *China Crosses the Yalu: The Decision to Enter the Korean War* Stanford, CA: Stanford University Press, June 1, 1960

¹⁶ Chen, Jian (1994) *China's Road to Korean War*, The University of North Carolina Press. Chapel Hill London.

のみで説明するのは十分ではない。実際には、毛沢東の参戦動機については極めて複雑であり、更に深く研究する必要があると考えられる。そして、分析の枠組みとしては、四つの時点に分けて分析する必要がある。すなわち、金日成が南進する前の 1950 年 5 月、1950 年 6 月 25 日の金日成の南進開始、9 月 10 日からの米軍（米軍を中心とした国連軍）の仁川上陸、および 10 月 7 日の米軍による 38 度線越えである。それぞれの時期における朝鮮半島の戦況は毛沢東の考え方にも影響を与えている。つまり、各時期の毛沢東の朝鮮戦争に対する見方は完全に同じではないとも言える。

毛沢東の参戦動機については、学术界にも論争が多い。80 年代から 90 年代にかけて、中国とロシアのアーカイブ資料の公開によって、中国の朝鮮戦争への参戦の政策決定過程については次第にわかってきたものの、不明な部分はまだ残っている。当時の中共政治局の中に出兵すべきかどうかについて大きな論争があり、出兵すべきだと主張したのは毛沢東であった。10 月 2 日と 10 月 4 日の二回の政治局拡大会議では、どのような議論が行われたのか。その会議記録の一次資料はまだ公開されていない。これまでの研究は、それらの会議の内容についてはほとんどが当事者の回顧によるものである。最後に、毛沢東は、どのように政治局の他の指導者を説得して、出兵政策を出したのかについては、さらに深く分析する必要がある。

【参考文献】

(日本語)

- カミングス、ブルース（1991）、『朝鮮戦争の起源』東京、シアレヒム社
- 牛軍（2007）、『冷戦期中国外交の政策決定』千倉書房
- 神谷不二（1966）、『朝鮮戦争—米中対決の原形』中央公論社
- 朱建栄（1991）、『毛沢東の朝鮮戦争』岩波書店
- 朱建栄（2004）、『毛沢東の朝鮮戦争』岩波書店
- 沈志華（著）、朱建栄（訳）（2016）、『最後の「天朝」——毛沢東・金日成時代の中国と北朝鮮（上）（下）』岩波書店
- トルクノフ A. V.（著）、下斗米伸夫、金成浩（訳）（2001）、『朝鮮戦争の謎と真実：金日成、スターリン、毛沢東の機密電報による』草思社
- 平松茂雄（1988）、『中国と朝鮮戦争』勁草書房
- 和田春樹（1995）、『朝鮮戦争』岩波書店
- 和田春樹（2002）、『朝鮮戦争全史』岩波書店

(中国語)

- 鄧峰（2015）、『冷戦初期 東亜国際関係研究』九州出版社
- 李捷（2010）、「対抗美援朝决策过程阶段特点的几点分析」『中共党史研究』第12期
- 劉統（2001）、「中共对朝鮮戦争初期局勢の予測と対策」『党的文献』第6期
- 牛軍（2000）、「朝鮮戦争中中美决策比較研究」『当代中国史研究』第6期
- 牛軍（2013）、『冷戦与新中国外交の縁起 1949—1955』社会科学文献出版社
- 彭德懷伝記編写組（編）（1988）、『彭德懷軍事文選』北京、中央文献出版社
- 沈志華（1999）、『中蘇同盟与朝鮮戦争研究』広西師範大学出版社
- 沈志華（2000）、「中国出兵朝鮮决策的是非成敗」『二十一世紀』10月号
- 沈志華（2008）、『毛沢東 斯大林与朝鮮戦争』広東人民出版社
- 沈志華（2013）、『冷戦在亜州』九州出版社
- 沈志華（2015）、「出兵朝鮮の决策過程及動機分析」『炎黄春秋』第2期、
- 徐焰（1990）、『第一次較量—抗美援朝戦争の歴史回顧与反思』中国广播电视出版社
- 徐焰（2003）、『毛沢東与抗美援朝戦争—正确而輝煌的運籌帷幄』解放軍出版社
- 王焰（主編）（1993）、『彭德懷伝』当代中国出版社
- 章百家（2000）、「从危機处理的角度看抗美援朝出兵决策」『中共党史研究』第6期
- 中共中央文献研究室（編）（1987～1990）、『建国以来毛沢東文稿』第1—4冊、北京、中央文献出版社
- 中共中央文献研究室（編）（1992～1993）、『建国以来重要文献選編』第1—4冊、北京、中央文献出版社
- 中共中央文献研究室、中国人民解放军軍事科学院（編）（1993）、『毛沢東軍事文集』北京、軍事科学出版社、中央文献出版社
- 中共中央宣传部办公厅、中央档案馆編研部（編）（1993）、『中国共产党宣传工作文献汇编』北京、学习出

版社

中共中央文献研究室（編）（1990）、『周恩来外交文選』、北京、中央文献出版社

中共中央文献研究室（編）（1997）、『周恩來年譜（1949～1976）』北京、中央文獻出版社

中国外交部、中共中央文献研究室（編）（1994）、『毛沢東外交文選』北京、中央文獻出版社、世界知識出版社

中央档案馆（編）（1991～1992）、『中共中央文件選集』第15－18冊、北京、中共中央党校出版社

（英語）

Chen, Jian (1994), *China's Road to Korean War*, The University of North Carolina Press. Chapel Hill London.

Zhang, Shu Guang (1995), *Mao's Military Romanticism: China and the Korean War 1950～1953*, Lawrence: University of Kansas Press.

Sheng, Michael M. (1997), *Battling Western Imperialism: Mao, Stalin, and the United States*, Princeton, NJ: Princeton University Press,

Whiting, Allen S. (1960), *China Crosses the Yalu: The Decision to Enter the Korean War*, Stanford, CA: Stanford University Press.

Simmons, Robert R. (1975), *The Strained Alliance: Peking, Pyongyang, Moscow and the Politics of the Korean Civil War*, New York: Free Press.

Weathersby, Kathryn, “Soviet Aims in Korea and the Outbreak of the Korean War, 1945～1950: New Evidence from the Russian Archives”, *CWIHP Working Paper*, 1993, No.8

Weathersby, Kathryn, “The Soviet Role in the Early Phase of the Korean War : New Documentary Evidence”, *The Journal of American-East Asian Relations*, 1993, Vol.2, No.4

Halliday, Jon, “Air Operation in Korea :The Soviet Side of the Story”, in William Williams (ed.), *A Revolutionary War : Korea and the Transformation of the Postwar World*, Chicago : Imprint Publications, 1993

Stueck, William, *The Korean War : An International History*, Princeton : Princeton University Press, 1995